

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19330148
 研究課題名(和文)
 妊娠期から出産後における親の子ども表象の発達的变化と親子相互作用との連関
 研究課題名(英文)
 Mothers' representation of their children and children's socio-emotional development

研究代表者 遠藤 利彦 (ENDO TOSHIHIKO)
 東京大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：90242106

研究成果の概要(和文)：本研究は、妊娠期における母親の「想像上の赤ちゃん」に関する表象と、出産後における母親の「現実の赤ちゃん」に対する養育的関わり、そしてまた子ども自身の社会情緒的発達との間にいかなる関連性があるかを縦断的に検討したものである。結果として、母親の「想像上の赤ちゃん」に関する語りの特徴が、生後2ヶ月および6ヶ月時点における母子相互作用の中での母親の感性や情緒的トーンを、また生後18ヶ月時点の子どものアタッチメントの安定性を有意に予測することなどが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study longitudinally examined the relations among mother's representation of her "imaginary baby" in pregnancy, her later parenting behaviors to her "actual baby" after childbirth, and her infant's socio-emotional development. As a result, maternal narrative on her imaginary baby significantly predicted her sensitivity emotional tone in mother-infant interaction when her infant was 2 and 6 months old, and her infant's attachment security when her infant was 18 months old.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	6,000,000	1,800,000	7,800,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学(3902)

キーワード：妊娠期・アタッチメント・子ども表象・WMCI・縦断研究・想像上の子ども

1. 研究開始当初の背景

従来、特にアタッチメント研究の領域を中心に、子どもの社会情緒的発達の質を規定する要因として、養育者の感性(sensitivity)の豊かさが問題にされてきたと言える。しかし、より最近の研究は、養育者の感性は、子どもの種々の発達に影響する一つの要因ではあり得ても、必ずしも最も中核的な役割

を果たすものではないという可能性を指摘し始めている。むしろ、最近の動向は、より影響力の強い規定因を、養育者の日常の現実的なふるまいの中ではなく、養育者自身の主観的な世界あるいは表象の中に見出そうとしている。

この動きを最も典型的に反映しているのが、いわゆる「アタッチメントの世代間伝達」

研究の隆盛である。それは、基本的に、養育者の成育過程におけるアタッチメント経験についての記憶表象の質を測定・分類し、さらに、その子どものアタッチメント行動の質を測定・分類した上で、両者の間にいかなる関連性が存在するかを問うものであるが、その結果は、養育者のアタッチメントに関する表象の質に沿って、子どもがそれに相対的に合致したアタッチメント行動の質を形成する可能性を示唆している。

さらに最近では、例えば同じ養育者のもとで育つきょうだいが全く異なるアタッチメントタイプを呈することも例外的なことではないことなどから、親のアタッチメント全般に関する表象の質とは別に、親が自らの子ども一人一人に個別に形成する表象の質を問う必要性が主張されるに至っている。そして、その個別のアタッチメント表象が、親の全般的なアタッチメント表象やそれ以外の要因（例えば現在の夫婦関係などの社会文脈的要因）との絡みでいかに形成され、さらに現実の子どもとの関わりや子ども自身のアタッチメント形成にどのように関わるかということが、既に少数ながらいくつかの研究で検討され始めているのである。

さらに、こうした研究の流れの中で示唆されてきているのは、この養育者の個別の子どもに関する表象が、既に妊娠期からかなり明瞭な形で成立しており、そして出産後にかけても相対的に安定した形で連続するのではないかということである。つまり、養育者の子どもとの相互作用は、妊娠期のある時点から実質的な始まりを見せており、さらにその「想像上の赤ちゃん」に関する表象が、妊娠期を超えて、生まれた後の現実の子どもとの相互作用や子ども自身の発達にも一定のバイアスをかけ得る可能性があるということである。しかし、こうした可能性に関わる直

接的な証左は、一部の文化圏の限られたサンプルにおいてしか得られておらず、また、必ずしも綿密に計画された長期縦断研究の中での知見ではないため、それを体系的な調査計画に基づき、厳密に検証していく必要があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、上述したような基本的関心に基づき、約3年に亘る縦断研究の実施を通して、妊娠期における親の「想像上の子ども」に関する表象の質が、養育者の日常的状況における、どのような養育行動や情動表出の側面に特に現れ、また、今度はそれらを介して、いかに子ども自身のアタッチメント形成や社会的適応性等に通じ得るのかを究明する。

3. 研究の方法

協力者

研究始発点においては、妊娠期の母親 45 人に調査協力依頼を行い、承諾を得、その後、出産を挟んで母子を対象とした縦断研究を行った。ただし、全研究期間を通して、予定された調査すべてを実施することができた母親は 30 人であった。母親 30 人のうち、2 ケースが双生児であった。子どもの出生順位は、第1子が 17 ケース、第2子が 13 ケース、第3子が 2 ケースであった。性別は、男児 17 人、女児 15 人であった。母親の平均年齢は 30.9 歳 (SD=3.4) であった。

手続き

調査は妊娠後期、生後 2 ヶ月、生後 6 ヶ月、生後 18 ヶ月、30 ヶ月のときに実施した。各時点での調査内容は、以下の通りであった。

(1) 妊娠後期

妊娠後期に家庭訪問し、生まれてくる子どもの性格、行動、関係性などについて母親の

主観的な知覚や期待を問う約1時間程度の半構造化面接「Working Model of the Child Interview; WMCI」を母親に実施した。

(2) 生後2ヶ月

生後2ヶ月に家庭訪問し、母子相互作用場面について約10分間のビデオ観察を行った。その後、乳児表情写真（「日本版 IFEEL Pictures」）を用いて、母親の情動知覚傾向の測定を行った。

(3) 生後6ヶ月

生後6ヶ月に家庭訪問し、母子相互作用場面について約10分間のビデオ観察を行った。

(4) 生後18ヶ月

生後18ヶ月に家庭訪問し、日常場面における子どもの行動について約2時間程度の自然観察を行い、子どものアタッチメント安定性の測定を行った。

(5) 生後30ヶ月

生後30ヶ月には、母親に、質問紙を通して、子どもの問題行動傾向についての回答を求めた。

測度

(1) 母親の子ども表象（妊娠期）

妊娠期における母親の子どもに関する表象を評価するために、Zeanah & Benoit (1995)の「Working Model of the Child Interview; WMCI」（以下WMCIとする）を使用した。WMCIは、子どもや子どもとの関係性に関する親の主観的な知覚や経験を評定するための約1時間程度の半構造化面接である。インタビューは、子どもの性格、行動、発達的变化、関係性などに関する質問から構成される。なお、妊娠期のWMCIインタビューは、まだ子どもが生まれる前の時期であり、先行研究に従い、質問はすべて未来形で行った。インタビュー反応は、Zeanah, et al.(1996)のコーディングマニュアルに基づ

いて評定を行い、さらに下位スケールごとの評定値に基づいて、母親を以下の3つの表象タイプに分類した。

<安定型 (Balanced) >

安定型の表象は、子どもについての描写が豊かで詳細であり、またその語りは柔軟で整合一貫しており、さらには子どもへの情緒的関与や受容が高く、ポジティブな情緒的トーン（喜びや楽しさ）が強いといった特徴を持つ。養育者は、子どものポジティブな側面のみならず、ネガティブな側面に関してもバランスよくオープンに語るができる。

<非関与型 (Disengaged) >

非関与型の表象は、子どもへの情緒的関与の欠如や心理的距離の強さによって特徴づけられる。子どもに関する描写は乏しく最小限であり、感情表現が乏しく、知的に冷やかに語られる。また、養育の感受性や子どもの受容が低く、子どもへの無関心が強い。

<歪曲型 (Distorted) >

歪曲型の表象は、子どもへの情緒的関与は強く認められるものの、表象内にある種の歪みや偏りが認められる。例えば、養育者が他の関心事に心を奪われていたり、子どもに対して混乱、圧倒されていたり、子どもとの関係性において役割逆転が認められたりする。子どもについて多くのことを語るものの、その語りは、混乱し、まとまりがなく、理解することが困難で、一貫性が低い。感情表現が過剰で、特にネガティブな感情が強く表れる。

(2) 母子相互作用

生後2ヶ月、生後6ヶ月における母子相互作用の自由場面について5~15分間のビデオ撮影を行った。生後2ヶ月の母子相互作用は5分間、生後6ヶ月の母子相互作用は10分間を評定の対象とした。以下の母親の行動特徴について評価を行った。

①母親のポジティブ感情（生後2ヶ月）

母子相互作用で表出された母親の感情について分析を行った。5秒間を1単位として、そこでの母親の主要な感情を「ポジティブ」、「ニュートラル」、「ネガティブ」のいずれかに分類した。

②母親の感性 (生後2、6ヶ月)

母子相互作用における母親の感性 (子どものシグナルを的確に読み取り、適切に即座に応答すること) について、Ainsworth et al.(1972)のマニュアルに従い、9件法で評定を行った。

(3)母親の情動知覚傾向

母親の情動知覚傾向を測定するツールとして、「IFEEL Pictures」(Emde et al., 1993)の日本版(日本 IFEEL Pictures 研究会,2005)を使用した。IFEEL Pictures はさまざまな表情をした乳幼児の写真 30 枚から構成される。母親に写真を見せ、それぞれの写真の中の乳幼児がどのような感情や情緒を抱いていると思うか、筆記による自由回答を求めた。得られた回答は、マニュアルに基づいて、18の情動カテゴリーに分類し、各情動カテゴリー反応数を求めた。

(4)子どものアタッチメント安定性

生後 18 ヶ月に家庭訪問し、日常場面における子どもの行動について約2時間程度の自然観察およびビデオ録画を行った。訪問後、家庭でのビデオ観察をもとに、Waters & Deane(1985)のアタッチメント Q ソート法(AQS)を用いて、母子間のアタッチメント安定性について評定した。

(5)子どもの問題行動

Achenbach(1992)の「Child Behavior Checklist : CBCL」の質問紙を用いて、母親に評定を求めた。CBCL の下位尺度のうち、子どもの内在化行動 (不安/抑うつ・引きこもり等) と外在化行動 (攻撃行動・破壊行動等) を分析の対象とした。

4. 研究成果

(1)妊娠期における母親の子ども表象の分類

妊娠期における母親の子ども表象は安定型 9 人(30%)、非関与型 10 人(33%)、歪曲型 11 人(37%)に分類された。

(2)妊娠期における母親の子ども表象と生後の母親の行動との関連

妊娠期における母親の子ども表象が生後 2、6 ヶ月における母親の行動とどのように関連するのか、両者の関連性について検討を行った。妊娠期における母親の子ども表象と生後 2 ヶ月における母子相互作用との関連を検討するため、母親の表象タイプを独立変数、母親の行動を従属変数とした 1 要因分散分析を行ったところ、「ポジティブ感情」と「感性」に対する母親の表象タイプの主効果が有意であった。多重比較の結果、妊娠期に安定型であった母親は、非関与型や歪曲型であった母親よりも、生後 2 ヶ月における母子相互作用場面において子どもに対するポジティブ感情や感性がより高かった。

同様に、妊娠期における母親の子ども表象と生後 6 ヶ月における母子相互作用との関連についても検討を行ったところ、「感性」に対する母親の表象タイプの主効果が有意であった。多重比較の結果、妊娠期に安定型であった母親は、非関与型であった母親よりも、生後 6 ヶ月における母子相互作用において子どもに対する感性がより高かった。

(3)妊娠期における母親の子ども表象と生後の母親の情動知覚傾向との関連

妊娠期における母親の子ども表象が生後 2 ヶ月における母親の情動知覚傾向 (IFEEL Pictures) とどのように関連するのか、両者の関連性について検討を行った。

妊娠期における母親の子ども表象と生後 2 ヶ月における母親の情動知覚傾向との関連

を検討するため、母親の表象タイプを独立変数、母親の情動カテゴリー反応を従属変数とした1要因分散分析を行ったところ、「注意疑問驚き」と「その他」に対する母親の表象タイプの主効果が有意傾向であった。しかし、多重比較の結果、妊娠中に安定型であった母親は、非関与型であった母親よりも、相対的に注意疑問驚きの読み取りが多かったものの有意ではなかった。同様に、妊娠中に歪曲型であった母親は、安定型であった母親よりも、相対的にその他の情動の読み取りが多かったものの、有意傾向には至らなかった。

(4) 妊娠中における母親の子ども表象と生後18ヶ月の子どものアタッチメント安定性

妊娠中における母親の子ども表象が生後18ヶ月における子どものアタッチメント安定性とどのように関連するのか、両者の関連性について検討を行った。

妊娠中における母親の子ども表象タイプと生後18ヶ月における子どものアタッチメント安定性との関連を検討するため、母親の表象タイプを独立変数、子どものアタッチメント安定性得点を従属変数とした1要因分散分析を行ったところ、「アタッチメント安定性」に対する母親の表象タイプの主効果が有意であった。多重比較の結果、妊娠中に安定型であった母親の子どもは、それ以外の母親の子どもよりも、生後18ヶ月においてよりアタッチメントが安定していた。

(5) 母親の行動・情動知覚傾向と子どものアタッチメント安定性との関連

生後の母親の行動（生後2、6ヶ月）および情動知覚傾向（生後2ヶ月）と生後18ヶ月における子どものアタッチメント安定性との関連性を検討するため、両者の相関分析を行った。その結果、母親のポジティブ感情や感性が後の子どものアタッチメント安定性と有意に相関しており、生後2ヶ月にお

いてポジティブ感情や感性が高い母親の子どもほど、また生後6ヶ月において感性が高い母親の子どもほど、生後18ヶ月におけるアタッチメント安定性が高かった。

また、母親の情動知覚傾向と子どものアタッチメント安定性との関連については、「喜び」や「悲哀」の読み取りが子どものアタッチメント安定性と有意な正相関、「思考」の読み取りが子どものアタッチメントと有意な負相関の傾向が認められた。

(6) 母親の子ども表象・母親の行動・子どものアタッチメント安定性との関連

妊娠中の母親の子ども表象、生後2、6ヶ月の母親の行動、生後18ヶ月の子どものアタッチメント安定性との関連性を検討するためパス解析を行った。結果、妊娠中に安定型であった母親ほど、生後2ヶ月の母子相互作用において子どもへのポジティブ感情や感性が高く、また生後6ヶ月における感性も高く、さらに生後2ヶ月における母親の感性が生後18ヶ月の子どものアタッチメント安定性と関連することが示された。

(7) 母親の子ども表象と子どもの問題行動傾向の関連

妊娠中における母親の子ども表象のタイプと母親評定による子どもの30ヶ月時の問題行動傾向との関連を見たところ、妊娠中に安定型であった母親の子どもは、非関与型や歪曲型であった母親の子どもよりも、相対的に内在化問題や外在化問題が相対的に少なかったものの、統計的には有意でなかった。

(8) 本研究の理論的・実践的含意

母親の妊娠中の子ども表象の差異が母親の養育行動への影響を介して生後18ヶ月時点における子どものアタッチメントの安定性を分けるという本研究の結果は、欧米圏における先行研究に照らしても、意義あるものと言え、今後、その過程や機序も含め、さら

に精細に追究するに値する問題であると評価できる。また、アタッチメントの質は虐待等の不適切な養育と密接に関連することが知られているが、そのことからすれば、本研究の知見は、子どもとの相互作用が現実が始まる以前の妊娠期の段階から、不適切な養育に通じ得る母親のリスク因子を見出し、予防的介入を行うための実践的方途につながるものとも言え、今後、発達臨床的応用という視座からも大いに刮目に値すると言えよう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 14 件)

- 1 遠藤利彦 (2010). アタッチメント理論の現在：生涯発達と臨床実践の視座から行方を占う. 教育心理学年報, 49, 150-161.
- 2 遠藤利彦 (2008). 共同注意と養育環境の潜在的連関を探る. 乳幼児医学・心理学研究, 17, 13-28.
- 3 遠藤利彦 (2007). 語りにおける自己と他者、そして時間. 心理学評論, 49, 470-491.
- 4 遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論の現在：特に臨床的問題との関わりにおいて. 乳幼児医学・心理学研究, 16, 13-26. 他

[学会発表] (計 19 件)

- 1 本島優子・遠藤利彦 (2010/3/27). 家族の情緒的雰囲気と子どものアタッチメント. 日本発達心理学会 (神戸国際会議場)
- 2 本島優子・遠藤利彦 (2009/3/25). 妊娠期の母親の子ども表象と生後 18 カ月の子どものアタッチメント安定性. 日本発達心理学会 (日本女子大学).
- 3 本島優子・遠藤利彦 (2008/3/20). 生後 2 か月における母親の乳児表情の知覚と生後 18 か月における乳児のアタッチメントの安定性との関連性：縦断研究. 日本発達心理学会 (追手門学院大学).

- 4 本島優子・北川恵・遠藤利彦 (2007/9/18). 妊娠期における母親の子どもに関する表象と生後の乳児表情の知覚との関連性. 日本発達心理学会 (埼玉大学). 他

[図書] (計 14 件)

- 1 遠藤利彦 (2011). 乳幼児のこころ：子育て・子育ての発達心理学. 有斐閣.
- 2 遠藤利彦 (2010). 心理臨床の基礎としての発達心理学. 坂本真士・伊藤絵美・杉山崇 (編), 臨床に活かす基礎心理学 (pp. 127-154). 東京大学出版会.
- 3 遠藤利彦 (2009). アスペルガー症候群におけるアタッチメント. 榊原洋一 (編), 別冊「発達」30：アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助 (pp. 82-97). ミネルヴァ書房.
- 4 数井みゆき・遠藤利彦 (2007). アタッチメントと臨床領域. ミネルヴァ書房. 他

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 利彦 (ENDO TOSHIHIKO)
東京大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：90242106

(2) 研究分担者

数井みゆき (KAZUI MIYUKI)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：20282270

(2007～2008)

北川 恵 (KITAGAWA MEGUMI)

甲南大学・文学部・准教授

研究者番号：90309360

(2007～2009)

(3) 連携研究者 なし

(4) 調査実施協力者

本島優子 (MOTOSHIMA YUKO)

富山大学・周産母子センター・心理士